２０１６年6月２２日

学位（博士・言語教育学）申請論文　審査報告書

〈学位申請者〉　氏名　　曹　倩　　学生番号　３Ｄ５０１

〈論文題名〉

「テイル」の用法に関する研究

－「状態」と「立証のための情報提示」の用法を中心に－

〈　審査委員　〉

主査　外国語学部教授　石川 慎

副査　外国語学部教授　木村政康

副査　外国語学部教授　小林孝郎

Ⅰ．論文の主旨

日本語学習者にとって最も習得困難な学習項目の一つに「テイル」の用法がある。この「テイル」は、初級の早い段階から学習されるにもかかわらず、上級になっても最も誤用の多いものの一つである。この「テイル」は、これまで多くの研究者により研究されてきたが、その用法は、多岐にわたり、まだ多くの点で未解決の問題が残されている。

これらの多岐にわたる「テイル」の用法の全体を明らかにし、未解決の問題を明らかにし、学習の一助とすることが本論文の主旨である。

Ⅱ．論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

第1章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1.1　研究の背景

1.2　研究目的と研究方法

1.3　本研究の構成

第2章　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

2.1　「テイル」に関する研究の発端とその後の流れ

2.2　「テイル」の用法の分類に関して

第3章「テイル」の用法に関する分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

3.1　個々の用法のまとめ

3.2　「進行中の（動作・変化などの）動き」

3.3　「状態」

3.4　「長時間の継続・持続」

3.5　「繰り返し・習慣」

3.6　「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」・・・

第4章「テイル」の「状態」の用法について・・・・・・・・・・・・・・・・・65

4.1　先行研究における「状態」の「テイル」の研究とその問題点

4.2　「単純状態」の「テイル」について

4.3　「結果の状態」の「テイル」について

4.3.1　先行研究

4.3.2　緩慢変化動詞＋「テイル」

4.3.3　移動動詞＋「テイル」

4.3.3.1　先行研究

4.3.3.2　移動結果動詞について
4.4　本稿の「状態」の「テイル」のまとめ

第５章「テイル」の新たな第５の用法――立証のための情報提示・・・・・87
5.1　先行研究
5.2　問題提起
5.3　「情報提示」について
5.3.1　「情報」とは
5.3.2　情報理論から考えた「情報提示」とは
5.4　「立証のための情報提示」の「テイル」
5.4.1　談話分析による考察
5.4.2　「言っている」、「言った」、「言っていた」について
5.4.3　「立証のための情報提示」の意味規定とその関連図式

第６章　結論および将来の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
6.1　結論
6.2　将来の展望

【　参考文献　】

Ⅲ．本論文の概要

本論文の概要は、次の通りである。

第１章　はじめに

第１章においては、本研究の背景、研究目的、研究方法、構成について述べられている。

第２章　先行研究

「テイル」の意味と用法について、金田一春彦をはじめ、現在に至るまでの藤井正、高橋太郎、吉川武時、寺村秀夫、工藤真由美、庵功雄、江田すみれなどの研究者によって、どのように研究が行われてきたかについて詳細に述べ、それらの研究をまとめている。

第３章「テイル」の用法に関する分類

「テイル」の用法について、先行研究や用例収集などから次のように、まとめている

1「進行中の（動作・変化などの）動き」

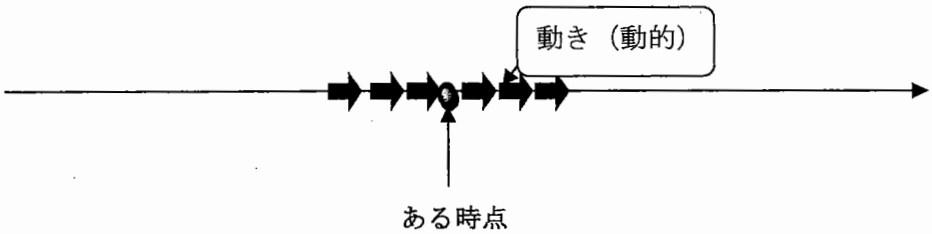
2「状態」
- 単純状態
- 結果の状態

3「繰り返し・習慣」

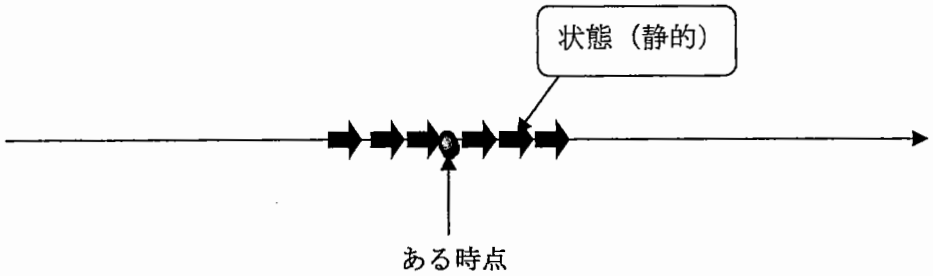
4「長時間の継続・持続」

5「立証のための情報提示」

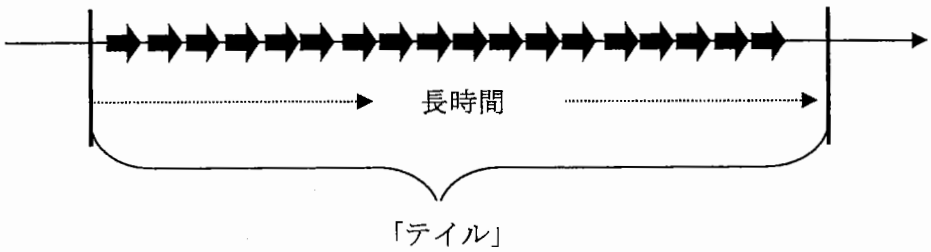
1の「進行中の（動作・変化などの）動き」という用法では、ある時点の進行中の動作や変化などを表すものであるとしている。



2の「状態」の「テイル」の用法では、従来の研究では、明らかになってこなかった動詞との関係に問題があるということを指摘し、この用法については、本論文の主題の一つであるため、さらに詳細な分析を第四章で行っている。

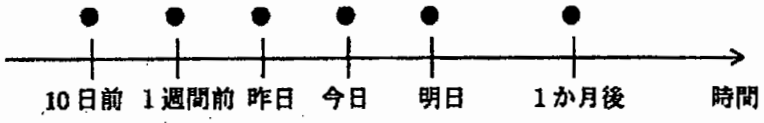


3の「長時間の継続・持続」の用法は、先行研究ではほとんど取り扱われてこなかった用法で、新たに提起した用法である。この用法は、「朝から晩まで」や「一日中」、「一晩中」、「一年中」などのような「長時間」を示すものが文脈上存在する場合に用いられる。焦点はその時間の長さにあるとし、図式で示すと、以下のように示している。

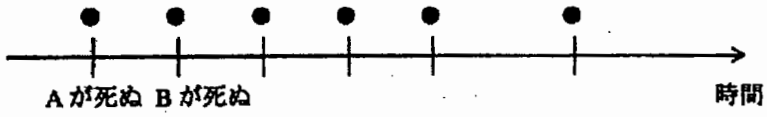


４の「繰り返し・習慣」の用法では、同一の主体によって、同じことが何度も反復して行われる行為を指す場合と、複数の主体によって繰り返し行われる動作を指す場合があるとし，これに関しては庵（2001）の下記の図式で示している。

(15) 田中さんは毎朝ジョギングをしている。



(16) 地球上では多くの子どもが栄養不良で死んでいる。

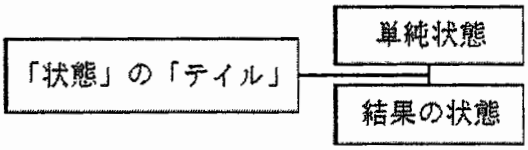


５の「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」については、従来「経験」という用法で論じられてきたが、これについては、本論文の主題であるため、第五章で詳細に分析している。

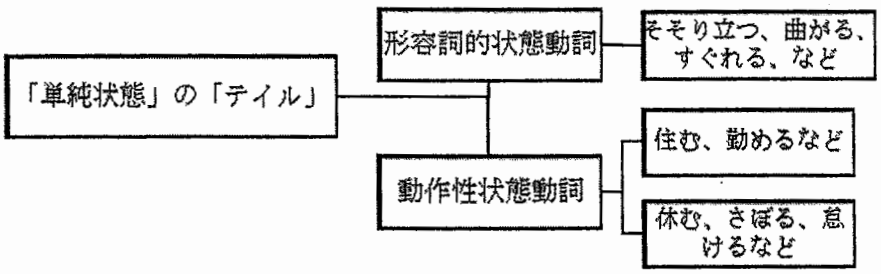
第４章「テイル」の「状態」の用法について

第４章では、2 番の「状態」に関する「テイル」の用法に関して、詳しく分析を行っている。

この用法に関しては、先行研究で述べられてきた「単純状態」と「結果残存」は、発話時点から見て、両者ともに動作性がなく、状態性を表していると述べ、その結果から、それらを「状態」の「テイル」として、一つにまとめ、以下のような図式で示している。

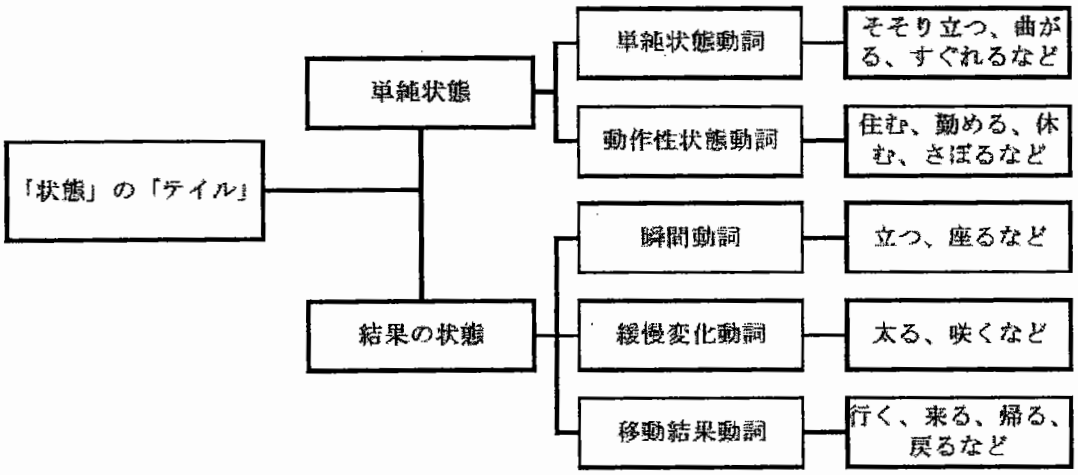


次に、「単純状態」の用法について分析し、従来言われてきた「曲がっている」、「すぐれている」などの形容詞的状態を表す動詞以外に、「住んでいる」、「休んでいる」、などの動詞もあることしている。これらの動詞に共通していることは、多様な動作によって構成されており、具体的な動作が感じられないという特徴を持っている。このような動詞を「動作性状態動詞」と名付けている。これらをまとめ、以下の図に示している。



次に、「結果の状態」について分析を行い、従来言われてきた「瞬間動詞」以外に「咲いている」、「痩せている」のような動詞があることを指摘している。これらの動詞の存在が従来の研究では、気づかれてはいたが、特殊な「瞬間動詞」として分類されたりしてきた。しかし、「花が咲く」や「痩せる」などは決して瞬間的な変化ではなく、むしろ逆に非常に変化が緩慢で、その変化の途中を観察することが不可能である。この種の動詞を「瞬間動詞」と区別するために、「緩慢変化動詞」と名付けている。

また、移動を表す「行く」「来る」なども、「行っている」、「来ている」などとなり、到着後の状態を表している。従来の研究では、このことから特殊な「瞬間動詞」に分類されてきた。このことについて動詞一覧表を用い、他の移動動詞について分析し、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」は他の移動動詞とは全く異なる性質を持っており、移動にある一定の時間を要するにもかかわらず、移動のその途中は表さず、その結果のみを表すという特殊な性質を持っているとしている。このことから、これらを「移動結果動詞」と名付け、「状態」を表す「テイル」を大きく、二種類に分け、以下の図式を示している。



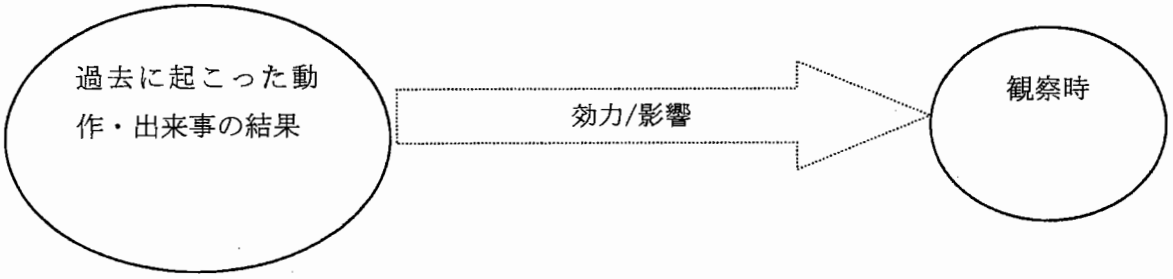
第５章「テイル」の新たな第５の用法――立証のための情報提示

ここでは、本論文の主題の一つである従来問題にされてきたいわゆる「子供の時に、両親を亡くしている。だから、やや性格が暗い。」のような「経験」の用法について論じている。この「経験」という名称は藤井正（1966）が名付けたものである。その後、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」などの諸説が現れているが、これらの中から、藤井正、高橋太郎、吉川武時また、工藤真由美、庵功雄、江田すみれの説を分析し、その主張を以下の図式としてまとめている。

藤井正、高橋太郎、吉川武時など

工藤真由美

庵功雄、江田すみれなど



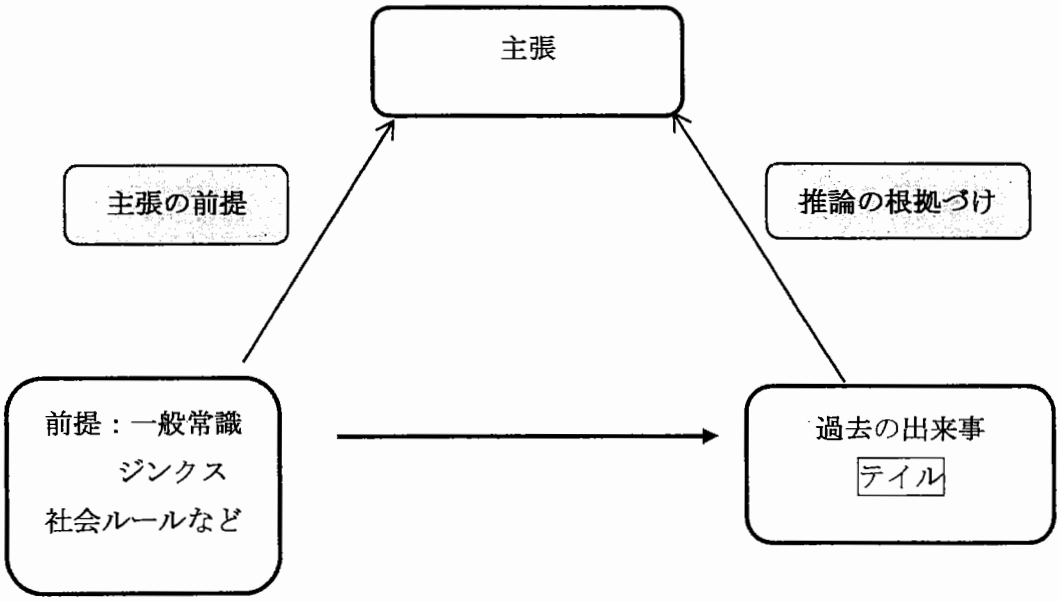
従来の先行研究では、「テイル」構文を使う理由に関しては、それは過去の出来事自体が「影響」や「効力持続」という要素を持っているから、現在へのつながりができていると分析されてきた。これに対して、筆者は従来とは異なり、短文ではなく、二つの文章を取り上げ、「テイル」構文について、談話分析の手法を用いて分析を行っている。その結果、これらの文章に出現する「テイル」の用法には、過去の出来事自体は何の「影響」も「効力持続」も持っていない場合があると指摘し、分析を行っている。

この分析の結果、何か「テイル」は、「情報」のようなものを表しているのではないかと

し、そこで、梅棹の情報理論を分析し、「情報が行動に影響を与える」というプラグマティックな視点から二つの文章の分析を行い、そこに潜む談話構造を明らかにし、更に他の12個の文章例にも当てはめ、同じ談話構造になるということを明らかにしている。

以上の談話分析から日本語では発話者（著者）が自分の主張を相手に提示することにより、自分の主張を立証したり、相手を説得したりするといった目的で、過去から、人為的にある出来事を持ち出し、立証の根拠とする際に、「テイル」構文を使うのではないかという結論を引き出している。また、これらの立証の根拠は一定の前提に基づいており、発話者はその「前提」に基づき自分の判断を下しているということを明らかにしている。このことから、日本語の「テイル」構文は過去の出来事などに関する「立証のための情報呈示」という機能を持っているというユニークな結論を導き出している。

この用法をまとめ、以下のような一般的な談話構造を図式にしている。



以上が結論である。

第6章　結論および将来の展望

ここでは、本論文の結論をまとめ、将来の展望について述べている。

Ⅳ．論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、２０１３年本学言語教育研究科日本語教育学博士前期課程を修了し、同年４月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了必要単位１０単位はすでに取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表および『拓殖大学言語教育研究』、学会発表など計９本となる。博士論文完成発表会は、２０１５年１０月２日に実施され、２０１５年１０月４日の言語教育研究科委員会で論文受理が承認されている。博士論文は２０１５年１２月２２日に提出されている。審査委員による論文審査は、２０１６年５月２７日拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果は全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、２０１６年６月３日に実施し、審議の結果「合格」と判定した。

１．研究テーマの適切性・妥当性について

習得困難な「テイル」に関して、未解決の問題を解決し、多岐にわたる「テイル」の用法の全体を明らかにし、学習の一助としたことは妥当である。

２、先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

調べられる限りの先行研究、文献資料の調査などを広汎に行っており、その情報収集は適切、かつ妥当なものであると判断する。

３．研究方法の適切性・妥当性について

調べられる限りの先行研究、文献資料の調査などを行い、多くの先行研究、資料に基づいて研究を進めたことは、適切、妥当であると判断する。また、分析に当たり、先行研究の問題点、具体的な用例の分析から研究を進めていることは、妥当である。

４．論旨の妥当性

論文の論旨は妥当であると判断する。

５．以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

全体の章立てなどの構成に関しては、適正であると判断する。また、筆者は外国人留学生であるが、その日本語表現は的確で高度なものであり、極めて優れた日本語力をもっていることがわかる。

6．論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

日本語学習者にとって最も習得困難な学習項目の一つである「テイル」の用法は、これまで多くの研究者により研究されてきた。しかし、その用法は多岐にわたり、未だ多くの点で未解決の問題が残されていた。この複雑な「テイル」の問題を解明し、用法の全体を明らかにしたことは評価に値する。

特に、「状態」の用法に関して、従来の研究では矛盾が多かったが、精緻な分析によりその用法の全体像を明らかにしたことは、大いに評価に値する。この件に関しては、特に小林委員から高い評価を得た。

また、「経験」の用法に関しては、従来行われてこなかった談話分析の手法を用い、「立証のための情報呈示」という機能を持っているという他に類を見ない独創的な結論を導き出したことも大いに評価できる。

学位申請者は、2013年本学言語教育研究科日本語教育学博士前期課程を修了し、同年4月博士後期課程に進み、現在に至っている。

現在、既に上海師範大学に就職が内定しており、今後の活躍が大いに期待される。

このような点から当委員会は、曹倩氏が帰国後、日本語教育の場で実践的な研究者、教育者として大いに活躍するものと確信している。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。